



産業の痕跡「事業」

「小樽商人」と呼ばれる実業家の系譜は、出身地別に分けることができる。そして縁の建築も多く遺されている。

江戸時代、近江商人は松前藩の場所請負人として、鯨を資源とした公益を行っていた。続いて近江商人に手ほどきを受けた松前商人が、小樽へやって来た。堺町に商店を置いた金子元三郎、小樽区公会堂を新築し寄贈した藤山要吉、小樽商業会議所・初代会頭に続き第2代小樽区長を務めた山田吉兵衛がその代表である。

最盛期の小樽経済で中心的役割を担ったのが、加越能商人（加賀、越前、越中、能登出身の商人の総称）である。東雲町の寿原邸亭主・外吉は、越中出身である寿原3兄弟の、孫の代にあたる。現北の誉酒造の創業者・野口吉次郎は加賀の出身で、家督を継いだ子息・喜一郎は和光荘（大正11年）の基本設計に携わっている。

加越能商人が築いた財産を、更に発展させたのが越後商人である。2代目・板谷宮吉は東雲の板谷邸亭主で、板谷家は海運業を中心に銀行や農場を経営した。寿原邸の創建者でもあり、色内に営業倉庫を置いて小豆で莫大な利益を上げた高橋直治、米、荒物、雑穀、倉庫業を営み、後に市へ能舞台を寄贈した岡崎謙も、越後商人である。

この他にも、「鯨御三家」と呼ばれた茨木與八郎、白鳥永作、青山留吉、大地主として知られた木村圓吉など、戦前の小樽では多くの実業家が活躍し、今もその痕跡を辿ることができる。

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第7号

名取高三郎商店



所在地／小樽市色内1丁目1-8

建築年／明治39年（1906）

構造／木骨石造2階建

明治32年（1899）の区制施行以前、於古発川を堺に北西側（名取高三郎商店側）が高島郡、南東側が小樽郡であった。そのためか、この辺りは「さかい町」と呼ばれ、於古発川には高島橋が架かる。

この建物は甲州出身の名取高三郎により、小樽では最大規模の大火である明治37年の色内大火から2年後に建てられた。そのため防火意識が徹底されている。構造は札幌軟石を用いた木骨石造で、瓦葺の寄棟屋根を乗せ、2階開口部には土蔵風の開き戸を設ける。同地区は防火のため、石造りと木造の建物を交互に配し、石造りの建物は境界にうだつと呼ばれる防火壁を設けている。角地に建つ名取商店も、通りに面した2箇所とうだつを設けている。

現在／ナトリ(株)小樽支店 大正硝子館

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 34 号

金子元三郎商店



所在地／小樽市堺町 1-22
建築年／明治 20 年（1887）
構 造／木骨石造 2 階建

政治家・実業家の金子元三郎が営んだ店舗。金子は明治 32 年（1899）に初代小樽区長に就任し、その後衆議院議員にも選出されている。実業家としては海陸物産、肥料販売、海運業を営み、財を成した。一時は明治 24 年（1891）に創刊し、中江兆民を主筆として迎えたことで知られる、小樽最初の新聞「北門新報」の印刷所としても用いられた。

両脇のうだつ、瓦葺の屋根、漆喰塗りの開き戸は、明治期小樽の木骨石造による町家の典型例といえる。建物は「平入り」と呼ばれる、妻面と垂直方向に入口を設ける形式で、屋根は洋風の小屋組であるキングポストラス（真東小屋組）で支えている。1 階は店舗と洋間からなり、天井を設けず 2 階の床を支える梁などが露出している。洋間は壁と天井に漆喰を塗り廻し、天井に中心飾りを付けている。2 階は中央の押入を境に、正面右側と左側に部屋を 2 室ずつ置いている。2 階の開き戸の内側には、上げ下げ窓が収まる。

現在／(株)小樽オルゴール堂カリオン堺町店

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 36 号

田中酒造店



所在地／小樽市色内 3 丁目 2-5

建築年／昭和 2 年（1927）

構造／木造 2 階建

かつて酒造業が盛んであった小樽の、酒造店の趣を今に伝える貴重な建築。現在、中心部とは小樽臨港線で分断されている感もあるが、田中酒造店を見れば、かつての色内通りの賑わいが窺い知れる。田中酒造店は店主・田中市太郎の時代より、85年にわたりこの建物で営業を続けている。

正面軒下は腕木を手前にせり出し、出桁を乗せる。これは「せがい造り」とも呼ばれ、明治から昭和初期の小樽にあって、商店や住宅で普及した屋根の架け方である。1階は右手の旧事務所を展示、試飲コーナーに改修するなど、商品の陳列・販売に活用しながら、できる限り創建時の姿に修復している。普段一般には見られない2階も、床や棚、付書院のある和室の続き間、壁と天井を漆喰で塗り、天井に中心飾りを設けた洋間など、丁寧に修復されている。

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 68 号

塚本商店



所在地／小樽市色内 1 丁目 6-27
建築年／大正 9 年（1920）
構 造／木骨鉄網コンクリート造 2 階建

近江出身の塚本源三郎による商店。明治 29 年（1896）に色内で建物を構えたが、同 37 年の色内大火で類焼したため、現在地に建物を新築した。かつては入母屋造り瓦葺の主屋に加え、土蔵、石蔵の他、鉄筋コンクリート造 4 階建の新館（昭和 8 年建築）などが併設されていた。

色内通りにおいてまず黒壁が目を引く建物であるが、最大の特徴はその構造にある。構造は木骨鉄網コンクリート造といって、木造の骨組みの外側に鉄網を張り、コンクリートを塗って仕上げる。一種の防火構造で、小樽では明治期に木骨石造が普及したのに続き、大正末から昭和初期にかけてセメントを用いたこの構造が新たに登場した。塚本商店はその先駆的な事例といえる。同じく黒塗りの小堀商店も、同様の構造である。

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 8 号

岩永時計店



所在地／小樽市堺町 1-21
建築年／明治 29 年（1896）
構造／木骨石造 2 階建

左右対称の外観が、当時高級品であった時計を扱っていた格式を感じさせる建築である。一方で、瓦葺きの切妻屋根に載るシャチホコ、持送りも含めた軟石による装飾的な軒、2 階正面花卉状のアーチからは、華やかさが感じられる。平成 3 年（1991）には 2 階ベランダ部分などが当時の姿に改修されている。施工は大虎（加藤忠五郎）による。

現在／(株)小樽オルゴール堂堺町店

text 原 朋教（建築史家、工学博士）
photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 15 号

早川支店



所在地／小樽市色内 2 丁目 4-7
建築年／明治 38 年（1905）
構 造／木骨石造 2 階建

新潟出身の川又健一郎が茶、紙、文房具を商う早川商店から暖簾分けを受け、現在の場所に開設したのが早川支店の始まりで、後に川又商店へ改称している。明治 37 年（1904）の大火後に新築されたのが現在の建築である。見所は、うだつと呼ばれる正面右側の小屋根をつけた袖壁で、防火の役割を果たすと同時に富の象徴であり、また街の表情を豊かにする装飾でもあった。小樽の中でも早川支店のうだつは漆喰による朝日、松梅、鶴鷹亀などのレリーフが施され、一段と華やかである。

現在／Vivre sa vie + mi-yyu

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 32 号

岡川薬局

所在地／小樽市若松 1 丁目 7-7
建築年／昭和 5 年（1930）
構造／木造 2 階建



創業は明治 28 年（1895）、福井県出身の岡川善太夫で、当時小樽では数少ない薬種売業であった。本建築は 2 代・松太郎の新築である。正面はマンサード屋根（4 方の下部が急勾配で上部が緩勾配の屋根）、ドーマー窓を設けて屋根裏も利用している。奥は切妻屋根で、軟石積みの蔵を併設している。1 階両脇の持送り、2 階両脇軒下の柱頭、ドーマー窓妻面の各場所にある装飾も見逃せない。現在は若い世代を中心に、日替わりの飲食提供・販売、宿泊施設、イベントスペースが運営されている。

現在／（旧）岡川薬局

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 33 号 久保商店



所在地／小樽市堺町 4-5
建築年／明治 40 年（1907）
構造／木造 2 階建

久保商店は明治 40 年（1907）創業の洋物小間物商である。建物では卸業と並行し店舗としても用いていた。1 階は現在、階段や天井など旧店舗の造りを生かした喫茶室であり、2 階は 3 室の和室が並ぶ。木骨石造の蔵は現在、ギャラリーとして使用可能である。かつて蔵は奥にもう一棟あり、店舗内の階段の脇でつながっていた。遺された軟石の開口部枠と漆喰塗りの扉がその跡である。

現在／さかい家

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 37 号

渡邊酒造店

所在地／小樽市稲穂 4 丁目 6-1
建築年／昭和 5 年（1930）
構 造／木造 3 階建



梁川通りの角地に建ち、角に乗せた塔屋が地区のランドマークとなっている。外壁に褐色のタイルを貼り、軒には雷文と古代ギリシャ建築に用いられた卵鋸模様が施され、2階窓上には酒樽の看板を掲げるなど、見ていて飽きない建築である。店内も、天井に模様を型押しした金属板を貼るなど、凝った造りとなっている。併設の蔵とは1階と2階で連絡し、2階入口の上部には漆喰で鳳凰と植物文様が描かれている。

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 41 号

戸出物産小樽支店



所在地／小樽市入船 1 丁目 1-1
建築年／大正 15 年（1926）
構 造／木造一部煉瓦造 3 階建

かつてこの場所は入船川の河口があり（昭和初期に暗渠化）、船入潤（斛による荷物の積み下ろし場）が置かれた入船七差路に建物は面している。もとは富山県に本店を置く、衣料呉服の支店として建てられた。隣の中越銀行小樽支店とは対照的に、外観の縦線が印象的な建物である。この奥には煉瓦造 3 階建ての倉庫が続く。倉庫内部は 1 階の鉄製円柱の頂部に肘木を乗せ、2 階の床を支える。

現在／スーベニールオタルカン

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 52 号 荒田商会



所在地／小樽市色内 1 丁目 2-17
建築年／昭和 10 年（1935）
構 造／木造 2 階建

海産業を商い、後に海運業にまで成長した、荒田太吉商店の本店事務所。運河沿いの小樽臨港線に面して建つ。左右対称の外観をした事務所らしい建築で、改修されているものの、内壁の漆喰や照明器具、窓枠は創建時の様子を今に伝える。背面の高橋倉庫や左隣の旧通信電設浜ビルなどと中庭で結ばれ、歴史的な景観のまとまりを生み出している。

現在／石原プロ おもしろ撮影館

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 72 号 小堀商店



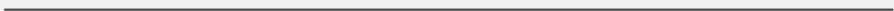
所在地／小樽市住吉町 14-4
建築年／昭和 7 年（1932）
構造／木骨鉄網コンクリート造 2 階建

塚本商店と同様、小樽では珍しい黒壁の建築。色に加え、木骨鉄網コンクリート造（木造に鉄網を張りモルタルを厚く塗る構造）の外壁、窓周りの額縁、瓦葺の寄棟屋根が堅牢さを感じさせる。全ての開口部に防寒シャッターを設け、窓は二重窓とし、スチーム暖房が備え付けられている。背面には漆喰塗りの蔵が併設されている。

現在／NPO 北海道職人義塾大蔵校

text 原 朋教（建築史家、工学博士）
photo 岩浪 睦（写真家）

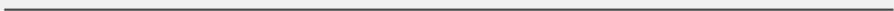
Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.



text 原 朋教 (建築史家、工学博士)

photo 岩浪 睦 (写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.



text 原 朋教 (建築史家、工学博士)

photo 岩浪 睦 (写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

text 原 朋教 (建築史家、工学博士)

photo 岩浪 睦 (写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

text 原 朋教 (建築史家、工学博士)

photo 岩浪 睦 (写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.